

# 日本英語学会第38回大会発表要旨

## 〈研究発表〉

Zoom 第1室 (11月7日午後)

司会 前田雅子 (西南学院大学)

### 「Immediate Containment」

林 慎将 (九州大学大学院)

本発表では、Chomsky (2013 [1]) のラベル理論において、集合間の包含関係が統語関係構築に原初的な関係概念であると主張する。

Epstein, Kitahara and Seely (2017 [2]) に従い、ラベルにより unvalued feature ( $[uF]$ ) の値が決定すると仮定する。

(1)  $\{ \gamma \{ \beta X[uF], \dots \}, \{ \alpha Y[F] \{ \dots W[uF] \dots \} \} \}$   
( $\alpha = Y, \beta = X, \gamma = \langle F, F \rangle$ )

(1) では、 $\gamma = \langle F, F \rangle$  のラベルを持つ構造に含まれる  $X, W$  の持つ  $[uF]$  ( $[uF]_X, [uF]_W$ ) は、インターフェイスにおいて  $Y$  の持つ  $[F]$  の値を基に解釈されると考える。ここで、 $\langle F, F \rangle$  ラベルの決定に寄与する  $[uF]_X$  はその集合の特性を決める上で必要不可欠な要素となる。一方、 $[uF]_W$  は集合の特徴付けの役割は果たしていない。 $\varepsilon = \langle F, F \rangle$  以外に  $[uF]$  の解釈を決める操作  $OP$  がある場合、 $OP$  により  $[uF]_W$  は  $\varepsilon = \langle F, F \rangle$  のラベルとは異なる解釈 ( $[F']$ ) が与えられることが可能だが、 $[uF]_X$  は、それが  $\varepsilon = \langle F, F \rangle$  のラベルを提供している事実により不可能であることが導かれる。

この主張を用いて、英語における随意的な主格付与の可否性と *wh* 演算子の随意的なスコープ解釈の可否性の二点を論じる。

[1] “Problems of Projection,” *Lingua* 130. [2] “Successive Cyclic Wh-Movement without Successive Cyclic Crashing,” Paper presented at ELSF 10th International Spring Forum.

### 「項の対併合に関する考察: 経験主項と優位性効果の観点から」

大塚知昇 (九州大学)

近年、生成文法ミニマリストプログラムでは併合操作に研究の関心が寄せられているが、議論は主に集合併合に関するもので、Chomsky

(2004) で提案された対併合の研究はあまり進んでいない。本研究は、対併合をより一般的に用いることで、周辺的な言語現象を説明できると主張し、対併合の研究の重要性を強調することを目標とする。

本研究では、しばしば経験主項として言及される(1)の *to* 句に焦点をあてる。

(1) John seems to Mary to be honest.

英語の経験主項は優位性効果の観点から矛盾した振る舞いを示すことが知られる。本研究では、基本的には項に集合併合と対併合のどちらも適用可能であると想定し、経験主項が対併合することで、この矛盾点が説明できると主張する。また説明対象を英語以外にも拡張し、ラベル付けや格付与の可否に基づき、経験主項の通言語的な振る舞いの差異を説明できることを示し、提案の妥当性を強調する。

[1] Chomsky, Noam (2004) “Beyond Explanatory Adequacy,” *Structures and Beyond*, 104-131, Oxford University Press, Oxford.

### 「収束性を伴うフェイズ」

田中章太 (関西外国語大学大学院)

本発表では、Grano & Lasnik (2018[1]) の収束性にもとづくフェイズに修正を加え、多重 WH 疑問文の一致関係に新たな説明を試みる。多重 WH 疑問文 (Who remembers where we bought which book?) では pair-list 読みが可能である。Chomsky (2015[2]) によると、WH 疑問文の解釈を得るには WH 句と主要部 C の間で Q 素性の一致が必要となる。したがって、pair-list 読みの場合は who と which book の両方が C との間で Q 素性の一致が必要となる。しかし、Grano & Lasnik (2018) の提案によると、which book はすでにフェイズ内部に含まれているため、C から値を受けるとフェイズ不可侵条約の違反となる。本発表では収束性をもとにしたフェイズを基本とし、そこに修正をくわえることで、問題となる一致関係に対し説明を与える。

さらに、本提案の帰結として、問い返し疑問文にも同様の説明が可能であることを示す。

- [1]“How to Neutralize a Finite Clause Boundary: Phase Theory and the Grammar of Bound Pronouns.”  
 [2]“Problems of Projection: Extensions.”

### 「英語のThere受動文が許容する語順パターンに関する通時的変遷と主語移動の適用可能性」

三上傑 (東北大学)

現代英語において There 受動文は、主語が受動分詞に先行する「虚辞 - be - DP - 受動分詞 - PP」語順しか許容しない。しかしながら、後期中英語期には主語が受動分詞に後続する「虚辞 - be - 受動分詞 - DP - PP」語順の例も同様の頻度で観察され、初期近代英語期を境に著しく衰退したとされる (cf. 本多 (2015 [1])). 本発表では、この There 受動文が許容する語順パターンの通時的変遷を、主語移動の適用可能性 (cf. 田中 (2010[2]))の観点から捉えることを試みる。具体的には、当該構文が「存在」を表す本動詞 BE の補部として「結果的状況」が選択された複文構造を有し、その補文内で主語移動が適用されるとする分析を提案する。そして、現代英語では主語移動の適用が義務的であるために、必然的に主語が受動分詞に先行する語順しか生成されないのに対し、後期中英語期には、その主語移動の適用が随意的であったため、いずれの語順パターンの生成も可能であったと主張する。

- [1]「There受動文の史的発達に関して」、『英語と文学、教育の視座』. [2]「EPP再考：英語史における主語の分布を証拠として」、『名古屋大学文学部研究論集 (文学56)』.

司会 漆原朗子 (北九州市立大学)

### 「英語分裂文における凍結原理」

北尾 泰幸 (愛知大学)

英語分裂文の焦点句形成には統語的移動が関与しているが、興味深いことに、焦点句が名詞句 (DP) の場合、焦点句から更に wh 句を抜き出すことが可能である (Pinkham and Hankamer 1975[1])。これは移動した焦点句から更に wh 句が移動しているため、凍結原理に抵触する統語的移動と考えられる (Wexler and Culicover 1980[2], Rizzi 2010[3], etc.)。一方、分裂文の焦点句が前置詞句 (PP) の場合は焦点句

からの wh 句の抽出は許されず、統語派生は凍結原理に従う[1]。本発表では、この分裂文の統語派生における凍結原理の誘発の有無は、DP 分裂文は代入構造 (Substitution) により派生されるのに対し、PP 分裂文は付加構造 (Adjunction) により派生されるためであると分析する。この派生構造の違いは、再構築・連結性に関する分裂文と関係節の類似性、および PP 位相にまつわる wh 句の抽出に関する統語事実から支持されることを提案する。

- [1] “Deep and Shallow Clefts,” *CLS 11* [2] *Formal Principles of Language Acquisition*, MIT Press [3] “On Some Properties of Criterial Freezing,” *The Complementizer Phase*, Oxford.

### 「In-situ focus文の構造」

森山倭成 (神戸大学)

日本語の焦点化に関係する文法現象には、分裂文に加えて、「のだのである」文がある。この文は、焦点化される要素が移動を起こさないことから、In-situ focus 文と呼ばれる (Hiraiwa and Ishihara (2012[2])). 本発表では、この文の統語構造について検討する。In-situ focus 文の構造に関しては、単一節分析と二重節分析がある。Hiraiwa and Ishihara (2002[1], 2012[2])は、「だ」を Foc 主要部と想定し、In-situ focus 文が単一節をなすとしている。一方、Terada (1993[3])は二重節であるとしている。この二つの分析は In-situ focus 文における「だである」がどのような性質を有するかに関して興味深い問題を提起する。本発表では、「だである」は、Foc 主要部であるとは考えにくく、文法的には通常のコピュラ文に現れる「だである」と同一であることを論じる。そして、カートグラフィーに基づく二重節分析を提案する。

- [1] “Missing Links: Cleft, Sluicing, and “No Da” Construction in Japanese” *MITWPL* 43. [2] “Syntactic Metamorphosis: Clefts, Sluicing, and In-Situ Focus in Japanese” *Syntax* 15. [3] “Null-expletive subject in Japanese” *Kansas Working Papers in Linguistics* 18.

### 「ラベル決定アルゴリズムによる日本語の複合語の統語的分析」

佐藤亮輔 (高知大学)

本発表ではChomsky (2013 [1])のラベル決定アルゴリズムを拡張し、日本語の3種類の複合語(Kageyama (2013) [2])のラベルは名詞素性を共有することによって決定されると提案する。この帰結として(1)後統語的複合語には対応する句が存在するが語彙的複合語とWord+複合語には存在しない、(2)後統語的複合語には丁寧語(subject honorification)の生起が認められるが語彙的複合語とWord+複合語には認められない、(3)語彙的複合語は全体としてアクセントを1つしか持たないがWord+複合語と後統語的複合語は全体として2つ以上のアクセントを持つことができる、(4)語彙的複合語とWord+複合語は「照応の島」を形成するが後統語的複合語は形成しない、という4つの事実を説明できる。

[1] “Problems of Projection,” *Lingua* 130. [2] “Postsyntactic Compounds and Semantic Head-Marking in Japanese,” *J/K Linguistics* 20.

Zoom 第2室 (11月7日午後)

司会 五十嵐海理 (龍谷大学)

### 「形式と相互行為機能の適合：極性質問に対する応答の拡張に着目して」

早野薫 (日本女子大学)

極性質問に対する否定応答の多くは、肯定で開始され、後続要素によって否定を表す “Yeah, but...”形式を取る (Sacks 1987 [1]) が、この「肯定→否定」応答の形式的バリエーションについては研究がなされてこなかった。そこで本研究では、英語日常会話における「肯定→否定」応答の形式を分類し、各形式がどのような機能を担うのか、日本語会話における同様の応答と比較したとき、どのような共通点、相違点があるのか、この3点を、会話分析の方法を用いて明らかにする。

分析から、英語の「肯定→否定」応答には、a) 逆接続詞を伴うもの、b) *except, though* などの接続詞を伴うもの、c) 肯定要素と否定要

素との文法関係がマークされていないもの、の3タイプがあること、それぞれ異なる相互行為上の機能を担うこと、そしてその形式-機能の対応関係は、日本語のそれと概ね共通していることが観察された。

[1] “On the Preferences for Agreement and Contiguity in Sequences in Conversation” In Button and Lee (eds.), *Talk and Social Organisation, Multilingual Matters*.

### 「as N as 構文のN」

松田佑治 (立命館大学)

as N as 構文とは、以下のような構文を示す。

- (1) Pirates of the Caribbean is as *Disney as it Gets*, [...] (松田 2019[1])
- (2) John’s hairstyle is as *2019 as they come*. (松田 2019[1])
- (3) The book itself is as *me as it gets*. (J. Carswell, *Talk of Treasure*)
- (4) Washington is as *Washington as ever*.

(*The Washington Post* 電子版, 2017/6/13)

本発表では、松田 (2019[1])、立川 (2020[2])などを踏まえ、固有名詞Nがもともと程度性や多数の属性を備えていると指摘する。そして、特定の文脈ならば、形容詞が要求される位置にも、固有名詞Nが生起しようと論じる。また、as N as 構文が容認される論拠として、「Nに対応する本来の形容詞が存在しないため、該当語を生起せざるをえない」という指摘は妥当ではないと示す。さらに、Taylor (1998, 2002) でいう強制 (coercion) においても、一部貢献できる点を指摘する。

[1] 松田佑治. 2019. 「Nの典型例や象徴を示す as N as it gets / as N as they come 構文」 [2] 立川健二. 2020. 『言語の復権のために ソシユール、イェルムスレウ、ザメンホフ』

### 「英語の2項名詞句における極度性の役割とその理論的示唆」

本多正敏 (横浜商科大学)

英語の2項名詞句 (binominal NPs) は、“N<sub>1</sub> of a(n) N<sub>2</sub>” という形式 (例: a jewel of an island) を持ち、N<sub>1</sub>とN<sub>2</sub>の間の比喩関係を示す文法要素が無いのにも関わらず、直喩表現 (例:

an island like a jewel) に対応する比喩解釈を許すことが知られている (Austin(1980 [1])). この点を踏まえ、Den Dikken (2006 [2]) は、直喩表現に相当する小節構造に述部前置操作を適用することで2項名詞句を派生する分析を提案している。

以上の先行研究を踏まえ、本発表では、Morzycki (2012 [3]) の極度性の観点から2項名詞句のN<sub>1</sub>に生起する名詞の性質を考察し、当該位置には、概略、想定外の値に言及する名詞のみが生起することを示す。そして、[2]の述部前置分析を応用・発展させ、2項名詞句の極度性を伴う比喩解釈を保障する統語的分析を提案する。

本発表の提案は、極度性が移動操作を動機付ける立場を支持するものである。

[1] “A Crescent-Shaped Jewel of an Island” [2] *Relators and Linkers*, MIT Press [3] “Adjectival Extremeness”

### 「説得する」類動詞と多重二格構文

前澤大樹 (藤田医科大学)

本発表では、日本語の「説得する」のような動詞のVP内構造と埋め込み節の内部構造を明らかにし、(1)のパラダイムに説明を与える。

(1) a. 太郎が 花子{を/に/が} 進学するよう  
説得した。

b. 太郎が 花子{を/\*に/\*が} 説得した。

(1a)で格標識の交替を示す要素(以下「被動者」)については、事実の観察から、二格被動者には主節・埋め込み節何れにも基底位置を認めねばならず、前者の場合には主節動詞の項であるヲ格被動者と同定できる一方、後者の場合にはガ格被動者と共起可能なため、その位置付けが問題となる。本発表は、この二格被動者が埋め込み主語としての特性を持つことを指摘し、それが多重ガ格構文の上位主語が二格で現れたものだと主張する。以上を前提に、分節的な動詞句構造を採用し、仮定する内在格付与の一般的機序の下で、(1)に見る複数の格付与特性が、節主要部上の意味素性の分布及び素性継承(Chomsky (2007[1])以降)のパターンから導かれると提案する。

[1] Chomsky, Noam. (2007) “Approaching UG from Below,” In *Interfaces + Recursion* =

*Language? Chomsky’s Minimalism and the View from Syntax-Semantics*, ed. by Uli Sauerland and Hans Martin Gärtner, 1–30, Mouton de Gruyter, New York.

司会 高梨博子 (日本女子大学)

### 「現在完了進行形のもつ「結果説明効果」について：認知文法的アプローチ」

志村春香 (筑波大学大学院)

現在完了形と同様、現在完了進行形はしばしば「継続完了」(過去に始まり、発話時まで継続する状況を表す)と「不定完了」(発話時より前の期間に起こった状況を表す)に分類されるが、違いもいくつかある。その1つに、不定完了の現在完了進行形は説明や言い訳などに言及する時に用いられる((1))。このような効果を「結果説明」効果とする。この効果は、現在完了形や継続完了の現在完了進行形には生じない。

(1) A: You look tired.

B: Yes, I’ve been working too hard lately.

(Declerck (1991 [1]))

本発表では、Langacker (2001[2])、De Wit (2017[3])による認知文法的アプローチに基づいて、現在完了形と現在完了進行形の2つの用法の時間構造を反映した認知スキーマを構築し、不定完了の現在完了進行形のスキーマの特徴から「結果説明」効果が生じることを論証する。

[1] *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*, Tokyo. [2] “The English Present Tense,” [3] *The Present Perfective Paradox across Languages, in English*, Oxford.

### 「形と意味の“ミスマッチ”を考える：認知文法からみたVすぎる構文」

佐藤らな (東京大学大学院)

日本語の「動詞の連用形+すぎる」の形式で何らかの過剰を表す構文 (Vすぎる構文) には、形式と意味の間にいわれる「ミスマッチ」があるとされてきた (e.g. Nakamura 2003, 由本2005)。例えば、「早く食べすぎる」の場合、動詞「食べる」に「-すぎる」が後接しているにも関わらず、「食べるのが早すぎる」と解釈される。先行研究ではVすぎる構文は、基本的に後接する動詞V1のつくるVP

1 概念構造内の要素に過剰を表す意義素 TOO が付与されると分析している。本発表は、「TOOの付与」と分析するのでは捉えきれなかった問題について説明を与えるとともに、認知文法の立場から、これまでミスマッチとされてきた現象を問い直す。日本語と英語を対照し、結論として、「ミスマッチ」は、同一の状況に対する両言語の合成経路 (compositional path) の違いとして解消されることを示す。

[1] 由本 (2005) 『複合動詞・派生動詞の意味と統語』 . [2] Nakamura (2003) “Notes on the Japanese Supporting Verb SUGIRU” [3] *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*.

### 「二重目的語構文が表す事象構造と所有代名詞の照応について」

植田正暢 (北九州市立大学)

英語の二重目的語構文の直接目的語に所有代名詞が生じる事例がある。参照点構造に基づく Van Hoek (1997[1]) の分析を仮定した場合、所有代名詞の照応関係は認知的際立ちの高い主語もしくは間接目的語を指すことが予想される。ところが所有変化から比喩的拡張を受けた事例の中には主語を指す読みのみ (例: Alice gave Beth her worried look.)、あるいは間接目的語を指す読みのみ (例: Alice gave Beth her look at the document.) になるものがある。本発表では Langacker (1991[2]) の所有変化の事象構造を仮定した上で、比喩の中には送り手が移動物を押す関係を前景化する場合と受取手が移動物に働きかける関係を前景化する場合があるという拙論を発展させ、事象構造の差異が直接目的語の照応の解釈に反映されることを論じる。

[1] *Anaphora and Conceptual Structure*. University of Chicago Press. [2] *Foundations of Cognitive Grammar*, Vol. 2. Stanford University Press.

Zoom 第3室 (11月7日午後)

司会 西山淳子 (和歌山大学)

### 「共合成による同族目的語構文の派生」

工藤和也 (龍谷大学)

英語の同族目的語構文は、①非能格動詞しか生起しない、②目的語が動詞と同語源でなければならない、③通常、形容詞などの修飾語句を伴う、などの特徴を持つことが知られている (Massam (1990 [1]) など)。本発表は、Pustejovsky (1995 [2]) の生成語彙論の枠組みに基づき、当該構文が動詞と同族目的語との共合成 (co-composition) によって派生すると主張し、そのプロセスに係る適格性条件として上記3つの特徴を説明する。また、共合成の結果、同族目的語構文の動詞句が創造タイプの語彙概念パラダイムを持つと仮定することで、同族目的語が「結果の目的語」の解釈を持つとする Nakajima (2006 [3]) の議論を補強する。先行研究では、同族目的語が動詞の項か付加詞 (述語) かが議論されてきたが、本発表の主張が正しければ、同族目的語は、それ自体は項であるが、それに付随する修飾語句が、同族目的語が表す事態の様態を叙述する述語として機能することが示される。

[1] “Cognate Object as Thematic Object,” *Canadian J. of Linguistics* 35, 161-190. [2] *The Generative Lexicon*, MIT Press. [3] “Adverbial Cognate Objects,” *LJ* 37, 674-684.

### 「反応目的語構文(ROC)の統語的・意味的特徴について」

西原俊明 (長崎大学)

古川武史 (福岡工業大学)

本発表は、(1)に示すROCの統語的、意味的特徴を明らかにすることを目的とする。

(1) She smiled her thanks.

(1)において動詞に後続するDPは項性を有し、目的語に適用される統語的操作(Wh-移動、受動化など)が可能であることを示し、同族目的語構文における動詞に後続するDPとの類似性にも触れてROCの統語的派生についての提案を行う。

[1] Flesler, Claudia and Anja Wanner (2001) “The Syntax of Cognate and Other Unselected Objects,” *Structural Aspects of Semantically Complex Verbs* ed. by Nicole Dehé and Anja Wanner, 105-130, Peter Lang, Frankfurt, Bern and New York. [2] Marantz, Alec (2005) “Objects out of the Lexicon:

Objects as Events,” ms., MIT.[3] 大庭幸男 (2013) 「英語の同族目的語構文の統語特性について」『関西英文学研究』6, 59-65, 関西英文学会 (日本英文学会)

### “Interpretive Economy and Presuppositions”

Toshiko Oda (Tokyo Keizai University)

This paper provides additional evidence for *Interpretive Economy* proposed in [2]. Relevant data comes from *compared to*-constructions. Under *Interpretive Economy*, context-dependent information is allowed to be part of truth conditions only when it is necessary. E.g. (1) *Compared to Mary, John’s grade is better* intuitively compares *Mary’s grade* vs. *John’s grade*, where the meaning of *’s grade* comes from context under the framework of [1]. However, (2) *Compared to Mary, John’s brother is older* does NOT compare *Mary’s brother* vs. *John’s brother*, because the context information of *’s brother* is not allowed due to *Interpretive Economy*. The context information is necessary in (1) but not in (2).

[1] Hohaus (2015) *Context and composition*: Ph.D. diss., U. of Tübingen. [2] Kennedy (2007) “Vagueness and grammar: the semantics of relative and absolute gradable Adjectives,” *L&P*.

### “Indexical Structures of “Bound” Plurals”

Asako Matsuda (Ochanomizu University)

This study focuses on two kinds of phenomena: one is *dependent plurality* observed in (1), where, under one reading, the plural pronoun is interpreted as a singular pronoun; the other is *partial binding* as in (2), in which the plural pronoun is bound by more than one antecedent (both are from [1]).

- (1) All men<sub>1</sub> think they<sub>1</sub> are smart.  
(2) Every woman<sub>1</sub> told [her<sub>1</sub> husband]<sub>2</sub> that they<sub>1+2</sub> should invest in the stock market.

Although the widely held minimal pronoun view (e.g. [2]) may account for dependent plural facts, it cannot be extended to partial binding. This study looks into the DP-internal structures of bound plurals, and proposes a morphosyntactic account, generalizable to both phenomena.

[1] Rullmann, H. (2003) “Bound-variable Pronouns and the Semantics of Number,”

*WECOL* 2002. [2] Kratzer, A. (1998) “More Structural Analogies Between Pronouns and Tenses,” *SALT* 8.

司会 眞田敬介 (札幌学院大学)

「近代英語における借用語動詞の受容について —persuadeに焦点を当てて—」

遠峯伸一郎 (鹿児島県立短期大学)

古英語の「駆り立て」の動詞(e.g. *tyhtan* ‘urge’)が取る「NP+to不定詞」補文は「NP」が主題項、「to不定詞」が着点項である。そしてこのタイプの補文はOE以降廃れることなく継続し、現代英語(PE)ではpersuade類の動詞(稲田(2000))に見られる。もし動詞の補文形式が動詞の意味によって決まるのであれば、中英語や近代英語で借用された「駆り立て」の動詞はpersuade類の動詞と同様の「NP+to不定詞」補文を取ることが予想される。本発表は、この予想をラテン語から近代英語(ModE)に借用されたpersuadeを用いて検証する。具体的には、*The Oxford English Dictionary, Second Edition*の例を検索して得られた資料を用いて、ModEで見られるpersuadeの特異的な性質を明らかにする。  
[1] 稲田俊明(2000)『補文の構造 第四版』大修館書店。[2] Los, Bettelou(2005) *The Rise of the To-Infinitive*, OUP.

「対格主語動名詞の史的発達についての一考察」

平田拓也 (名古屋大学大学院)

宇賀治(2000[1])は、対格代名詞または通格の名詞句を主語に持つ動名詞、すなわち対格主語動名詞は中英語では稀であったが、近代英語に入り次第に頻繁になったと論じている。しかしながら、具体的なデータに基づいて頻度が高くなった正確な時期を特定しておらず、頻度上昇の要因についても言及がない。

本発表は、電子コーパスを用いて対格主語動名詞の歴史的発達について調査し、その調査結果を動詞の動名詞の構造変化と関連付けて説明することを目的とする。具体的には、対格主語動名詞は1670年代に頻度が高くなり、その後は安定した頻度を保っていることを示す。また、この頻度の上昇は、

動詞的動名詞の構造がvPからTPへと拡張したことにより、動名詞内部でTから主語への格付与が可能になったことに起因すると主張する。また1670年以前は、主語への格付与がデフォルト格という有標な仕組みに依拠していたため、頻度が低かったと主張する。  
[1] 宇賀治正朋 (2000) 『英語史』開拓社、東京。

#### 「引用句構文の通時的変化に関する一考察」

小林亮哉 (名古屋大学大学院)

本発表は、歴史コーパスを用いた調査に基づき、英語史における引用句構文 (Quotative Construction: QC) の起源とその発達過程を明らかにし、それに対して理論的説明を与えることを目的とする。QCは古英語期から既に存在しており、主にsayやその祖語と共起し、現代英語に至るまで同様の形を保持している。

本発表では、QCの発達過程において、引用句の前置によって動詞の意味が希薄化(cf. Gyoda (1999[1]))され、その確立時期は生起する動詞の種類が増加した、後期近代英語期であると主張する。そして、QCにおける動詞の意味の希薄化により、V-to-T移動が消失した18世紀以降 (cf. Haerberli&Ihsane (2016[2]))もVのTへの移動が保持されると提案する。また、現代英語のQCにおける倒置の随意性は、発音対象となるコピーの位置の違いから導かれると主張する。

[1] “On the QC in English: A Minimalist Account,” *EL* 16. [2] “Revisiting the Loss of V-Movement in the History of English,” *NLLT* 34.

#### 「英語における主格ゼロ関係節の通時的発達について」

内田脩平 (名古屋大学大学院)

現代英語では存在構文の主語などの焦点要素に後続する位置を除いて、主格ゼロ関係節 (Subject Zero Relatives: SZR) は通常認められないが、初期の英語では比較的自由に用いられていた。本発表では、縄田(2012[1])と電子コーパスから得られたデータに基づき、英語におけるSZRの通時的発達を明らかにする。調査より、焦点要素に後続する位置に生じるSZRは英語史を通じて一定の頻度で観察される一方、それ以外の位置に生じ

るSZRは初期中英語までしか見られないことを実証する。そして、後者のSZRの分布が、[1]によって示された英語史における空主語proの分布と並行的であることから、当該のSZRはproを主語とする構造として認可されていたと主張する。また、初期中英語におけるproの消失によって、関係節内のEPP素性と解釈不可能な $\phi$ 素性が照合されなくなったことにより、特定の環境を除いてSZRが消失したと説明する。

[1] 縄田裕幸 (2012) 「古英語・中英語における「空主語」の認可と消失—話題卓立言語から主語卓立言語へ—」『島根大学教育学部紀要』40, 101-110.

#### 【オンライン発表なし】

#### 「アメリカ英語におけるfixing toの発達」

渡辺拓人 (関西学院大学)

アメリカ英語の *fixing to* は南部のアフリカ系アメリカ英語 (AAE) に由来するとされる。その通時的研究には Smith (2009 [1]) や Myers (2014 [2]) が挙げられるが、どちらも限られたデータに基づくものである。本発表では COHA・COCA から集めた用例をもとに、先行研究を検証しつつ *fixing to* の発達をたどる。

形式面で見ると、優勢な形は20世紀前後半で *fixin*(\*)から *fixing* へと移行している。この変化は文法化によるものではなく、書き言葉における AAE の表現方法の変化という文体上の問題と考えられる。縮約の進んだ *finna* は2010年代から多く観察される。Smith (2009) は形式の違いによる用法の違いについて *finna* がもっとも状態動詞と共起するとしているが、これは確認されなかった。

意味の発達については、純粋に近接未来を指す用例が多く見られるのは1920年代以降であり、*there* 構文での使用が認められるのは21世紀に入ってからである。とはいえそのような用例は少数に留まり、「意図」を表す用法が主である。

[1] “The history of *be fixing to*,” *English Today*.

[2] “*Fixin’ to*: the emergence of an American quasi-modal,” *American Speech*.

## 〈特別講演〉

Zoom 第1室 (11月8日午後)

### 「脳からみた統辞構造の計算」

酒井邦嘉 (東京大学)

脳機能イメージング (fMRI など) の手法を用いた言語脳科学の研究により、統辞構造の計算において、ブローカ野の一部が「文法中枢」として働くことが明らかとなった (酒井 (2019 [1]) など)。また、この領域の脳活動は、「併合度」の計算を反映することが示されている。併合度とは、二つの統辞体を一つにまとめる併合 (Merge) 操作の深さであり、短期記憶の負荷などから独立した指標である。また、自然な文 (Merge-generable) と人工的な語列 (Non-Merge-generable) を対比した最近の研究では、両方で脳活動のパターンが大きく異なり、文法中枢は自然言語の文処理において選択的に働くことが分かった (Tanaka et al. (2019 [2])). 以上の実験結果は、自然言語に共通の神経基盤があり、言語が生得的な脳機能であることを示す証拠である。

[1] 『チョムスキーと言語脳科学』(インターナショナル新書) [2] *Front. Psychol.* 10, 2673.

### 「動的文法理論とその展開—語法文法研究から理論へ」

中澤和夫 (青山学院大学)

動的文法理論は、Kajita (1977 [1]) によって唱道され、文法理論の中に時間軸を取り入れる。本講演では、まず、わたくし自身の、語法文法的研究をいくつか簡単に紹介し、それらは静的な文法理論では分析が難しいこと、即ち、動的な考え方に妥当性があるのを見る。次に、Kajita の提案する動的な記述形式を取り上げ、それが内包する問題点を明らかにする。その問題点を克服するに、Kajita の記述形式を修正し、新たな記述形式を提案する (Nakazawa (2018 [2]) 参照)。この新たな記述形式によると、上述の問題点が解消され、理論上の興味深い利点も得られる。例えば、偶然の欠損と構造上の欠損という概念に加え、偶然の出現なる現象も、理論の中で位置を占める。加えて、様々な拡張構文の持つ「特殊な特徴」は、何故どのように特殊であるかについて、理論の中で正当な位置づけが与えられる。こうして、語法文法的研究は理論

のより良いモデルの追及にとって豊かな、そして確かな実証的基盤となるのである。

[1] “Towards a Dynamic Model of Syntax” in *SEL* 5 [2] *A Dynamic Study of Some Derivative Processes in English Grammar*, Kaitakusha.

Zoom 第2室 (11月8日午後)

### 「歴史語用論の歩み：分類・射程・拡がりから見える分野の特徴」

小野寺典子 (青山学院大学)

日本でこの分野の初めての書籍『歴史語用論入門』(2011 高田・椎名・小野寺編[1]) が出版されてから10年が経ち、ちょうど増刷が決まった。

海外では1995年に、Andreas H. Jucker (編) による初めての論文集 *Historical Pragmatics* ([2]) が刊行され、明示的に歴史語用論分野が旗揚げされたとも言われている。

本講演では、歴史語用論という分野の国内外におけるこれまでの発展を振り返り、分野の成立の必然性、分類・射程の整理、拡がりの観察から、この分野の特徴・意義を示したい。

後半で、自らの「通時的語用論」研究から、最近注目される意味変遷の1つの新たな傾向(tendency)を紹介する。意味変遷では Traugott (1982 (1980) [3]) による「命題的から接続的へ、そして表出的へ」という傾向が長い間研究の指針として働き、多くの言語で実証されてきた。しかし、その反例ともいえる方向性が、新たな傾向として考えられるのではと提案する。

[1] 『歴史語用論入門』(2011) 大修館書店。

[2] *Historical Pragmatics: Pragmatic Developments in the History of English*. Benjamins.

[3] “From propositional to textual and expressive meanings: some semantic-pragmatic aspects of grammaticalization.” *Perspectives on Historical Linguistics*, ed. by W. P. Lehmann and Y. Malkiel, 245-271. Benjamins.

### 「異なるタイプの言語の対照から見える普遍性—コリャーク語と英語の場合」

呉人恵 (富山大学)

シベリア北東部のコリャーク語 (Koryak) は、



危機言語である一方で、言語学的には新旧両大陸の「要」的な言語として重視されてきた [1]。講演では、コリヤーク語と英語を対照し、両言語が類型的に極めて異質である反面、注目すべき類似性も有することを指摘する。

相違性については、統合度、格組織、語順を取り上げ、両言語が、孤立的 vs. 複統合的、中立型・主格対格型 vs. 能格型、統語論的語順 vs. 語用論的語順など、対照的なタイプを示すことを論じる。

類似性については、所有表現と属性叙述を取り上げ、コリヤーク語の4つの所有接辞と英語の所有格形・of形の使い分けのいずれにも名詞句階層 [2] が関わっていること、両言語の属性叙述化に共通の原理による制約違反が働いていることを論じる。

[1] 渡辺己 (1992) 「新旧両大陸の要：チュクチ・カムチャツカ語族」宮岡伯人編『北の言語：類型と歴史』, 147-177. 東京：三省堂 [2] Silverstein, M. (1976) Hierarchy of Features and Ergativity. In R.M.W Dixon (ed.) *Grammatical Categories in Australian Languages*, 112-171. Canberra: Australian National University.

Zoom 第3室 (11月8日午後)

### 「自由選択表現の意味と分布について」

中西公子 (お茶の水女子大学)

自由選択表現 *any* は、*John can/\*must eat anything, John ate anything \*(he found)* に見られるように、その分布に制約があることが知られている (Dayal (1998 [1])など)。日本語では、「何でも」のような「不定語+でも」がこれに対応するとされる (Nishigauchi 1990 [2])。本発表では、後者が英語に見られるような分布の制約を受けず (例えば、「ジョンは何でも食べてよい/食べねばならない」)、また反復の解釈の有無などに関して、両者が異なる意味的性質を持つことを示す。さらに、中西・平岩 (2019 [3])に基づき、「誰でも」は「誰であっても」という無条件構文であることを主張し、その構成的意味分析を提示する。それにより、*any* との意味と分布の違いを説明する。

[1] “*Any* as inherently modal” L&P. [2]

*Quantification in the Theory of Grammar*, Kluwer.

[3] 「日本語の裸不定語」『極性表現の構造・意味・機能』開拓社。